



CLIMBの意味分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮畑, 一範 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006285

CLIMBの意味分析*

宮 畑 一 範

0. 母国語の意味を捉えるのは、とりわけそれが基礎的な語彙に属するものである場合には、個々の意味的構成要素の集合体という形で行われるのではなく、むしろ全体像として体感される抽象的なイメージを通して行われる。一方、外国語の意味を捉える際には、体感されるイメージ形成の基盤となる経験的（ある意味では文化的な）蓄積を欠く為、母国語（基礎語彙）の意味を捉えるように簡単にはいかず、何らかの操作的な労力が要求される（また母国語であっても、馴染みのない、或いは極めて薄い語、所謂上級・専門語彙に属するものも同様に、操作的な把握が必要とされる）。そのひとつの手段として、幾つかの relevant な意味特徴を抽出し更にそれをネットワークとして統合することによって、ネイティブスピーカーの持つ体感的なイメージに操作的に接近する、という様式が考えられる。この意味特徴及びそのネットワークの在り方には、文脈によって左右されず固定化している（大部分の用法に共通する部分が観察され、言わば意味が均質な）内在型と、文脈がなければ潜在的で、特定の文脈が与えられて初めて同定が可能となる文脈依存型（典型的には、固有名詞の類が考えられる）という2つの両極と、固定的で中心を成す部分を有しながら、その中の一部が文脈によって変容を受ける中間的な型を想定することができる。本稿では、CLIMB を例に取り、この中間型のひとつのパターンを示すことにする。

1. CLIMB という動詞は、移動の方向に関して、非常に興味深い振舞い方をする。まず、この語は、単独使用された時（例えば、CLIMB the stairs/the mountain/the ladder/the tree）には、その対象物の下から上（頂上）までの移動を表し、一般に途中で停止するという解釈は成り立たない。常に上方向への移動であるというのは、(1a) の表現が (1b) としか理解されず、(1c) は非容認であることから窺い知ることができる。

- (1) a. climb to the second floor
- b. climb from the first floor to the second floor
- c. *climb from the third floor to the second floor

辞書的定義やネイティブスピーカーによる直観的説明においても、上方向への移動というのがまず観察される要因であることを考えてみると、この移動様式が CLIMB の典型であるとするのは、十分に妥当であると思われる。ところが、CLIMB は、DOWN と共に使用することによって、今見た方向とは逆の下方向への移動を表すことが可能となる（CLIMB DOWN the stairs/the mountain/the ladder/the tree）。また、(1c) では駄目であった表現も、DOWN

と共に使用することによって、全く容認可能となる。

(2) climb down from the third floor to the second floor

しかしながら、ここで注意しなければならないのは、CLIMB と CLIMB DOWN とが移動の方向において対立を成しているのではなく、CLIMB UP と CLIMB DOWN とが対立を成すということである。このことは、CLIMB、CLIMB UP、CLIMB DOWN のそれぞれに様々な角度の斜面を対象物として取らせた場合の文脈的制約を示した (3a-c) にきれいに現れる (特に (3b) (3c) の対称性に注意；尚、波線は、結合が自然なものとなる凡その境界を表す)。

(3) a. climb	*the level plane
	*the slight slope
	??the 30° slope
	the 45° slope
	the 60° slope
	the steep slope
b. climb up	the precipice
	*the level plane
	*the slight slope
	*the 30° slope
	?the 45° slope
	the 60° slope
c. climb down	the steep slope
	the precipice
	*the level plane
	*the slight slope
	*the 30° slope
	?the 45° slope
the 60° slope	
the steep slope	
the precipice	

即ち、CLIMB を中心として、UP と共に使用することによって上方向への動きである度合いが強められ、DOWN と共に使用することによって CLIMB UP と対立する下方向への動きを表すことが可能となるのである。そして、CLIMB UP と CLIMB DOWN とは、反重力的移動であるという特徴¹⁾を共有しつつ、移動の方向においては正反対の運動を表現してい

る、²⁾と捉えることができるのである。

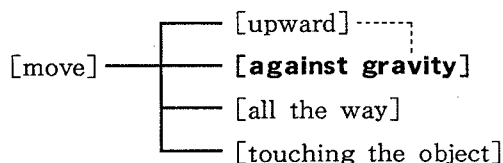
2. 次に CLIMB の移動の様態に焦点を当てて考察を加えることにする。多くの英和辞典に見られる説明によると、この動詞には「(両)手足を使って」という特徴が非常に有力であるように見受けられるが、実際の文脈においては、木の幹の上を「手足を使って」移動するカブトムシに言及するのに、CLIMB (UP/DOWN) を使わずに、GO や WALK で表現する傾向にあり、逆に「手足」のないカタツムリや蛇等が、CLIMB (UP/DOWN) の動作主として妥当に選択されるということが観察される。

(4) The beetle | ?climbed up | the tree.
 | *climbed down |

(5) The snail/snake climbed up/down the tree.

この(4)、(5)の例から推論するに、CLIMB の場合、いずれの例においても必要とされるのは、動作主が何らかの自然な手段で動作の対象物に付着し、重力に逆らって移動を行っている状況にあるということであるように思われる。³⁾ 即ち、(4)の文脈的制約は、カブトムシの移動が自然に軽々と行われていると認識される為に、反重力的移動であるという特性を喚起させ難いからであり(勿論、反重力的特性をその動きの中に見て取れば——例えば、非常に接近してカブトムシの観察を行っており、足の爪によってしっかりと樹皮にしがみついている様を認識した場合——、CLIMB の使用は充分妥当なものになり得るということが、インフォーマントによって報告されている)、また、(5)は、CLIMB における重要な視点が、付着の手段ではなく、反重力状態で付着していること自体に置かれている(付着の手段として「手足」が問題となるのは、主体人間時のその動作主に本来備わっている特性によるものであるに過ぎない；動作主がカタツムリの時には吸盤のように吸い着く足部が、蛇であれば体全体が問題になるのと同じことである)ということを示唆していると考えられる。

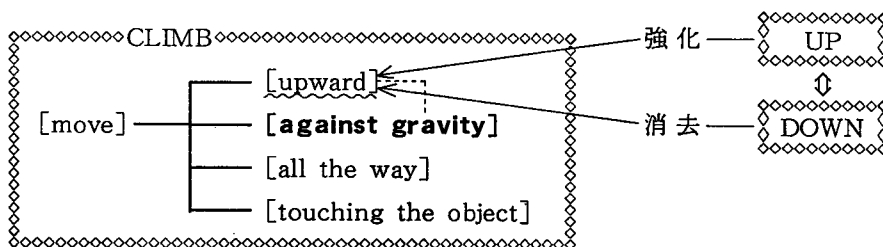
3. 以上の考察に基づくと、prototypical な CLIMB の意味特徴のネットワークは次のように想定できるだろう。



[図1]

即ち、CLIMB は、単独で使用された場合には(典型的には)、重力に逆らって([against gravity])最も自然な形で付着しながら([touching the object])⁴⁾その対象物の一番上部ま

で ([upward]/[all the way]) 移動する ([move]) ことを表すのである。⁵⁾ そして、この上方向への重力に逆らった移動という行為は、UP によって強めることができる。また、重力に逆らっているという点では同じであるが (つまり、抵抗しなければ落下してしまう)、DOWN と共に使用することで [upward] の持つ relevancy が消されてしまい、全く反対の移動の方向を表すこともできる。ここで注意しなければならないのは、運動の方向に関しては全く逆であるものの、反重力的移動である点では共通している (言わば、[against gravity] を軸として、CLIMB UP と CLIMB DOWN とが蝶番のような関係にある) ということと、その反重力という特性が、下方向よりは上方向の移動様式とより密接に関連する (これは取りも直さず、上方向の移動が CLIMB の典型として理解される——単独で使用された場合には、上方向の移動しか表現しない——ということと合致する) ということである。⁶⁾



[図 2]

4. 本節では、CLIMB が UP/DOWN 以外の移動の方向を表す particle と共に使用される若干の例を取り上げ、そのいずれもが UP-DOWN の上下認識パタンの投影として捉えられることを概観する。

CLIMB は、INTO/OUT OF と共に用いることによって、ベッドに潜り込んだりベッドから這い出たり、車に乗り込んだり車から降りたりする動作を表現することができる ((6a) と反対の動作は CLIMB OUT OF で、(6b) と反対の動作は CLIMB INTO で描写される)。

(6) a. She climbed into bed and sank gratefully into the yielding mattress.
(*Cat People*, Ch. 3)

b. She saw her father climb out of the unmarked car . . .
(*The Nightmares on Elm Street*, Pt. 1, Ch. 8)

(6a) の例では、床からベッドに這い上がって潜り込むという動作が表現されているが、その主体としては、特に子供が想定され易く、成人の場合にはかなり酔っばらっているとかへへとに疲れている等の特定の文脈 (ベッドまで這う這うの体で辿り着くという状況) と結びつく傾向にある。⁷⁾ CLIMB OUT OF との対立で考えると、床面を基準面とした上下移動の認識パターンを観察することができるだろう。因みに、これに関連した言廻しとして、“climb between sheets” というのがあるが (理解される情景は (6a) に同じ)、必ず床からベッドへの

上方向の移動である必要があり、水平方向の認識となる日本風の布団では、同様の表現は不自然なものとなる (*climb between futon put on a tatami floor)。 (6b)については、車の座席が地面よりも上部に位置することを思い浮かべると、INTO/OUT OF の表現の下敷きとして上下認識パターンが存在しているということが、簡単に見て取れるだろう。いずれの例においても、その動作に「よっこらしょ」という大儀な感じが常に伴う理解が要求されるのは、CLIMB の反重力的特性 ([against gravity]) に対応するものであると考えられる。

また、OVER と共に用いて、対象によじ登って越えるという行為を表すことができる。

(7) Nick peered over the wall to the level of the deck. The guard had his back to them, scanning the fields. Silently and swiftly, Nick climbed over [the wall] and came up behind the guard . . .

(*Black Rain*, Ch. 24)

ここで CLIMB が OVER と共起できるのは、OVER の表現する運動軌跡のイメージが、垂直軸に沿った上下移動の認識パターンを含んだものであるからである。これが ALONG や AROUND 等の particle となると、水平面上の移動を典型とする為、CLIMB との共起は極めて困難なものとなる (?? climb along/around (something))。⁸⁾ 更に、この OVER の移動様式と共通するイメージは、バスタブに入ったりそこから出たりする行為を表現する CLIMB IN/OUT にも観察される ([図3] の動作と反対の行為は、CLIMB IN によって描写される)。



“Rose is Rose”

[図3]

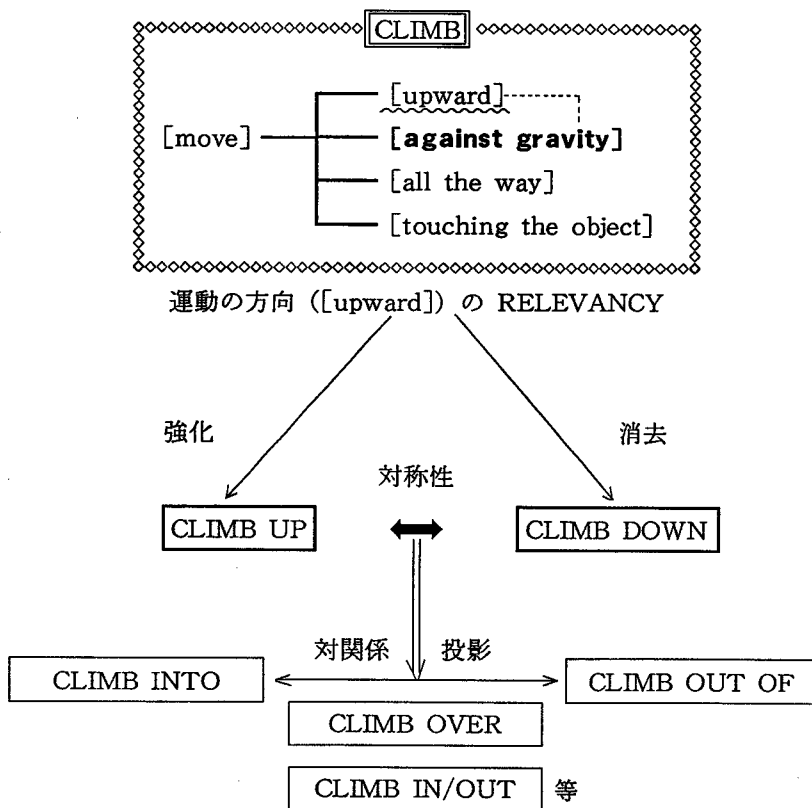
この例において非常に興味深いのは、対象物であるバスタブに付着して「よっこらしょ」という感じを伴って動作を行うような小さな子供に主体が限定され、バスタブをまたいで軽々と出入りが可能な大きな子供や大人を主体としては使用されない（その代わりに、GET/COME IN/OUT 等の表現が選択される）ということである。⁹⁾

以上の例から導き出される知見は2つある。ひとつは、いずれの例も、prototypical な

CLIMB の持つ上方向という運動の方向性に関わる特徴の relevancy が文脈によって抑圧されているということである。そして、更に注目すべきは、これらの表現には全て前節で見た CLIMB UP / DOWN の対関係（移動の上下対認識パターン）が投影されている、ということである。¹⁰⁾

5. 最後に、CLIMB という動詞の意味を、その展開の様子と絡めてまとめておくことにする。この語の意味は、典型となる部分を中心に3つの階層を成し、それぞれが密接に関わりを持ちながら拡がりを見せる（[図4]）。

まず、prototypical な CLIMB は、対象物に自然な形で付着しながらその上部まで動く上方向への反重力的移動（とりわけ重要となってくるのは反重力という特性）という形で設定できる。次のレベルは、UP/DOWN の対称性によって、運動の方向に関する意味特徴の relevancy がそれぞれ強化／消去され、反重力的特性を軸として CLIMB UP と CLIMB DOWN とが対称を成すという形で展開を見せる。そして、更に次のレベルへの拡大は、この UP と DOWN の移動様式の対関係の投影という要因を接点に行われているのである。



[図4]

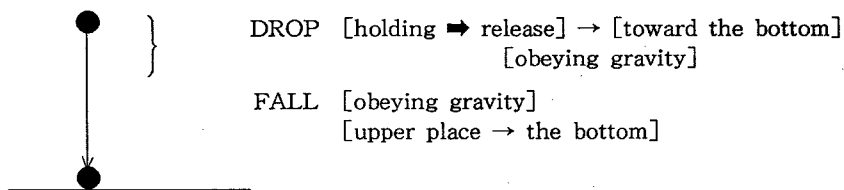
【註】

※ 本稿の作成に当っては、Donald W. Ryland 氏の協力に負うところが大きい。この場を借りて深く謝意を表しておきたい。尚、同氏の言語経歴については以下の通り。1960年 California 州 Fresno 生まれ。1985年まで同州 Columbia (60-74)、Jamestown (74-78)、San Jose (78-85) に在住（以降日本在住）。よって、同氏の言語感覚に areal form が観察される場合、それは west coast pattern であると考えられる。

1) この特性を想定すると、地表に対する勾配が垂直に近付けば近付く程その対象物の許容度が高くなるという(3a-c)の文脈的制約に、妥当な説明を与えることが可能になる。つまり、角度が急になればなる程、重力に逆らっているという感じが増す為、許容度が上がってくる、という訳である。

また、上下移動を表す語には、重力に逆らうか従うかという視点が重要になってくるものがある。例えば、DROP や FALL は、重力に従った移動様式であると捉えられる。DROP の場合、重力に逆らって何らかの形で holding されている状態から、急激に解放されるという点に重点が置かれ、重力に従った下への移動というのは、言わばその付随的な結果であると見做すことができる（従って、落下の過程において被妨害可）。また、この [holding ⇒ release] という視点は、主体-客体関係や意志の介在という要因を容易に想定させる為、DROP の他動詞の使用を促進することになる。

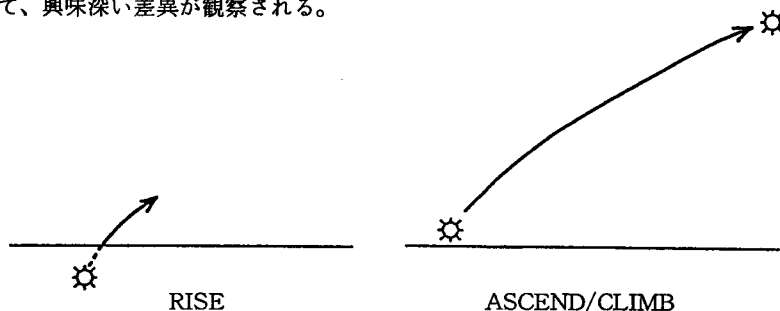
【蛇足ながら、He dropped the challenge. の理解に反映される [holding ⇒ release] に注意；一旦は accept したか或いはしようとした (holding 状態) が、結局は拒絶したと解される。He rejected the challenge. (端から拒絶) との差異に注目。】他方 FALL の場合は、上位（にあると認識される状態）から最下位（にあると認識される状態）へ重力に逆らうことなく速やかに移動するという側面に焦点が置かれ、従って、自動的な色合いが強まる。【He dropped it, but somebody caught it before it struck on the ground. は自然な表現だが、?? It fell, but somebody caught it before it struck on the ground. は、FALL の表す complete action ([upper place → the bottom]) と矛盾する為、非常に不自然な表現と判断される。因みに、進行形で用いると、一時的動作を表すことになるので、違和感は軽減され、許容度は若干上がることになる：? It was falling, but somebody caught it before it struck on the ground.】



このように考えると、物理的な落下運動からのメタファーとして、「眠りに落ちる」（起きていようとする意志の力から解き放たれて、眠っているという状態に帰結する）を表現するのに、“drop off to sleep” “fall into a sleep” が多く観察されるのも頷けよう。

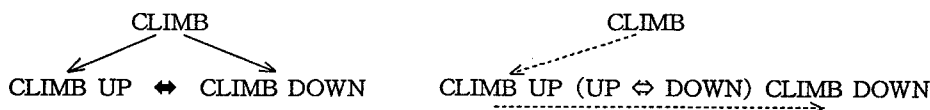
いずれにせよ、重力の認知というのが、少なくともそれによって引き起こされる様々な現象を知覚するという程度には、日常生活を営む人間の認識の中で非常に重要な位置を占め得るということは、想像に難くない。

- 2) この対称性は、prototypical な UP と DOWN の対義性に起因するものであると考えられる。
Cf. Lindner (1982)
- 3) 反重力的感覚は、その動作主の重量感と大いに関連があるように思われる。例えば、これらの例においては、落下した際の音（カブトムシだとパシャ／カサッという乾いた軽い音であるのに対して、カタツムリや蛇だとポトッ／ドサッという重い感じの音をたてる）に対する日常的経験が、背景的知識として作用していると考えられる。
- 4) この動作の対象物は、表層上明示されている（或いは、明示されていないにせよ、容易に同定可能である）ことが多いが、（類推は可能であるとは言え）かなり曖昧な場合も観察される。例えば、The temperature climbed to 50℃. という表現（勿論、「50℃に上がった」という解釈しか許容されず、「50℃に下がった」は不可）では、温度が一般には棒状の液体温度計によって計られ、温度表示の目盛りは上に行く程値が大きいという現実が背景的知識としてあって、温度（正確には、中のアルコールや水銀等の液体）がその中を上昇していく細管が、その対象物として問題になっていると考えられるが、実際に上記の言廻しが用いられる際に、これが意識されることは殆どないと思われる。因みに、CLIMB に比べ対象物の明示要求が強い CLIMB UP/DOWN を使用すると、The temperature ?? climbed up to 50℃/ *climbed down to -15℃. という制約が現れる。
- 5) 太陽が CLIMB の主体として用いられることがあるが、この際、RISE や ASCEND が使われる場合と比べて、興味深い差異が観察される。



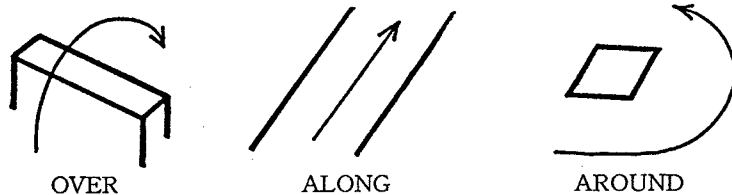
まず、RISE では地／水平線下からのかなり短い arc に注意が向けられるのに対し、ASCEND/CLIMB の場合は太陽が地／水平線から上りきった状態から天上までの長い arc が問題とされる（[all the way] の反映）。Cf. The sun rises/ ?? ascends/ *climbs from the horizon. 更に、CLIMB の場合は、太陽が何かと闘いながら上昇していくという印象が伴う場合にのみ使用が限られ（[against gravity] の反映：The sun climbs slowly into the polluted/cold sky.）、従って、ASCEND に比べると連想され得る arc の長さは短いものとなる傾向にある。

- 6) CLIMB、CLIMB UP、CLIMB DOWN の3つの表現は、結果的には CLIMB を中心とした3角形を成す（左図）が、それぞれの意味的連鎖性の点で言えば、[upward] の CLIMB から CLIMB UP、そして UP ⇔ DOWN の対義性によって CLIMB DOWN へと展開していくのであって（右図）、決して CLIMB DOWN があって付随的に CLIMB UP へと派生していくのではない。



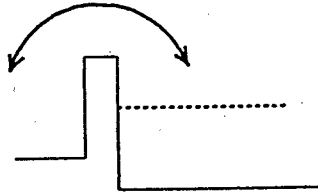
7) 因みに、(6a)の引用部のすぐ前には、“she” (=Irena : 成人女性) の描写として、Irena went to her room and found she was even more tired than she thought. とある。

8) それぞれの図形的なイメージは、以下のように描けるだろう。Cf. Lakoff (1987)、Taylor (1989)、Masamura (1989)



但し、CLIMB AROUND の結合は、木等の周りを螺旋状に上っていく様を想定する場合に限って、使用可能なようである。

9) CLIMB の使用の条件としてここで問題となる運動のイメージは、下図のようなものであると考えられる。



大きな子供や大人になると、この移動様式に含まれる上下認識（及び、その行為に伴う「よっこらしょ」という感じ）が希薄になるか、或いは欠落してしまうので、主体として妥当でなくなるのである。

10) このような運動の方向における relevancy の抑圧は、本稿で取り扱った CLIMB に限って現れるというものではない。例えば、GO/MOVE/WALK/CRAWL といった動詞は、[forward] という方向が典型的な動きではあるが、GO/MOVE/WALK/CRAWL backward/sideways が許容されることからわかるように、文脈によっては、この [forward] の持つ relevancy が失われる。この例においても、典型的な方向（前）からその反対の方向（後）へ、更に前-後の対立の反映として両横（斜前後）の方向へという意味的連鎖の展開の様を見て取ることができるだろう。いずれにせよ、重要な接点となるのは、移動の方向が異なるだけで、運動様式自体は同じ（同様）である、という要因なのである。

また、若干の貸借動詞、例えば英語の RENT や中国語の「借」にも同様の現象が観察される。両者共に、典型的には「借りる」の意に解されるが、文脈に応じて「借りる」「貸す」という相対立する方向の行為を表し得る。He rented a boat. の場合、「彼」がボート貸しをやっていて誰かにボートを貸してやった、という状況を想定することも可能であるものの、一般的には、誰かからボートを借りた、という解釈が優先的に成立する。そして、He rented a boat from (somebody)/to (somebody) という表現を用いて、それぞれ貸借の方向性を明示することができる。「我借他一本书」の場合も同じく、想定される文脈によっては「私は彼に1冊の本を貸す」という理解が成立するものの、「私は彼から1冊の本を借りる」という優先解釈が成り立つ。そして、貸借の方向を明示するには、同じ「借」の字を使って、「我从他那儿借一本书」「我向他借一本书」（彼から借りる）、「我借给他一本书」（彼に貸す）と表すことが可能である。

勿論、運動の方向性の relevancy が固定している場合もある。ASCEND/DESCEND のように、対になって上下の運動のそれぞれ受け持ちが決まっている場合がそうである（日本語における上下運動の動詞は、「あがる」「さがる」、「のぼる」「おりる」のように上下の分担が決まっており、方向に関する relevancy は固定している）。この運動の方向の relevancy の固定に伴って、当該の両語の動作主は、本来進むべき方向に動くことがかなり強く要求されるようである。これは、例えば、戦車が本来進むべき方向に向かって（砲口を進行方向に向けて）斜面を上或いは下に移動する様は、The tank ascends/descends the ramp. と表現できるが、後ろ向きに斜面を上り下りする様は、? The tank ascends/descends the ramp backward. では多少奇異に聞こえることから窺い知ることができる。因みに、CLIMB を使えば、若干ニュアンスは異なるが（[against gravity] との絡みで、斜面の急さ、或いは障害物の存在等が想定される）、使い方自体は全く問題はない：The tank climbs up/down the ramp backward.

参 考 文 献

- Fillmore, Charles J. 1975. "An alternative to checklist theories of meaning," *Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 123-131.
- Hayakawa, S. I. 1987. *Choose the Right Word: A Modern Guide to Synonyms*. New York: Harper & Row. (Rev. ed. of: *Funk & Wagnalls Modern Guide to Synonyms and Related Words*. 1968.)
- Ikegami, Yoshihiko. (池上嘉彦) 1975. 『意味論：意味構造の分析と記述』 東京：大修館。
- Jackendoff, Ray. 1985. "Multiple subcategorization and the θ -criterion: the case of climb," *Natural Language and Linguistic Theory* 3, 271-295.
- Kunihiro, Tetsuya. (國廣哲彌) 1967. 『構造的意味論—日英両語対照研究—』 東京：三省堂。
- . 1970. 『意味の諸相』 東京：三省堂。
- . 1982. 『意味論の方法』 東京：大修館。
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lindner, Sue. 1982. "What goes up doesn't necessarily come down: the ins and outs of opposites," *Papers from the Eighteenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 305-323.
- Masamura, Hidemi. (政村秀實) 1989. 『図解英語基本語義辞典』 (*An Illustrated Dictionary of English Words*) 東京：桐原書店。
- Miyahata, Kazunori. (宮畑一範) 1990. 「シノニムの研究 I ～SCREAM, SCREECH, SHRIEK, SHRILL, SQUEAL の意味分析～」 *Queries* 27, 55-77.
- . 1991a. 「BLUBBER とその等価表現」『英米文学』 No. 39, 93-104.
- . 1991b. 「シノニムの研究 II ～BELLOW と ROAR の意味分析～」 *Queries* 28, 43-57.
- Nida, Eugene A. 1975. *Componential Analysis of Meaning*. The Hague: Mouton.
- Persson, Gunnar. 1990. *Meanings, Models and Metaphors: A Study in Lexical Semantics in*

- English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Rudzka-Ostyn, Brygida. ed. 1988. *Topics in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ruhl, Charles. 1989. *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. New York: State University of New York Press.
- Tanaka, Shigenori. (田中茂範) 1987. 『基本動詞の意味論 コアとプロトタイプ』 (*Lexico-Semantics of English Basic Verbs: Exploration into Lexical Core and Prototype*) 東京: 三友社.
- . 1990. 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』 東京: 三友社.
- Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- Tsohatzidis, Savas L. ed. 1990. *Meaning and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*. London: Routledge.

引 証 文 献

- Brady, Pat. "Rose is Rose." *Mainichi Daily News*, 30 Nov. 1989.
- Brandner, Gary. *Cat People*. London: Sphere Books, 1982.
- Cogan, Mike. *Black Rain*. New York: Pocket Books, 1989.
- Cooper, Jeffrey. *The Nightmares on Elm Street*. London: Futura Publications, 1987.